第3章

データからみる
WWL事業の成果・効果

Index

本章では、WWL 事業の実態や成果・効果について、各種アンケートの分析結果からデータでご紹介します。

p.86 1. 生徒の参加状況

1-1 WWL 事業の活動に取り組んだ割合
1-2 WWL 事業の取組みの機会
1-3 WWL のテーマ
1-4 WWL 総合熱心度・満足度
1-5 日本への関心

p.88 2. 生徒の成長

2-1 生徒の成長実感
2-2 教員から見た生徒の成長
2-3 分析の枠組み
2-4 1年生から3年生にかけての成長
2-5 WWL 事業参加生徒以外との比較
2-6 熱心度との関係
2-7 熱心度の変化とその要因

p.97 3. 卒業後の状況

3-1 卒業後の進路選択や、なりたい職業への影響
3-2 現在の生活に役立っている高校時代の経験
3-3 WWL事業に熱心に取り組むことの効果

1. 生徒の参加状況

1-1 WWL 事業の活動に取り組んだ割合

令和５年度の生徒アンケートにて、WWL 事業の活動に取り組んだ割合と、熱心度についてきいた。

「課題探究の授業・活動」は、８割以上の生徒が取り組んだと回答した。「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」は半数以上の生徒が取り組んだと回答した。

取り組んだ活動のうち、「課題探究の授業・活動」、「国内でのフィールドワーク」、「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」、「企業との連携事業」の順に、熱心に取り組んだ割合が高かった。

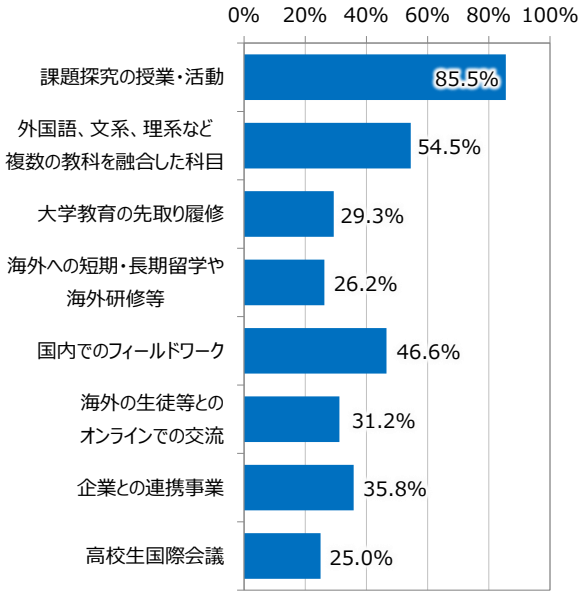


図１ WWL 事業の活動に取り組んだ割合（複数回答）（n=13,987）

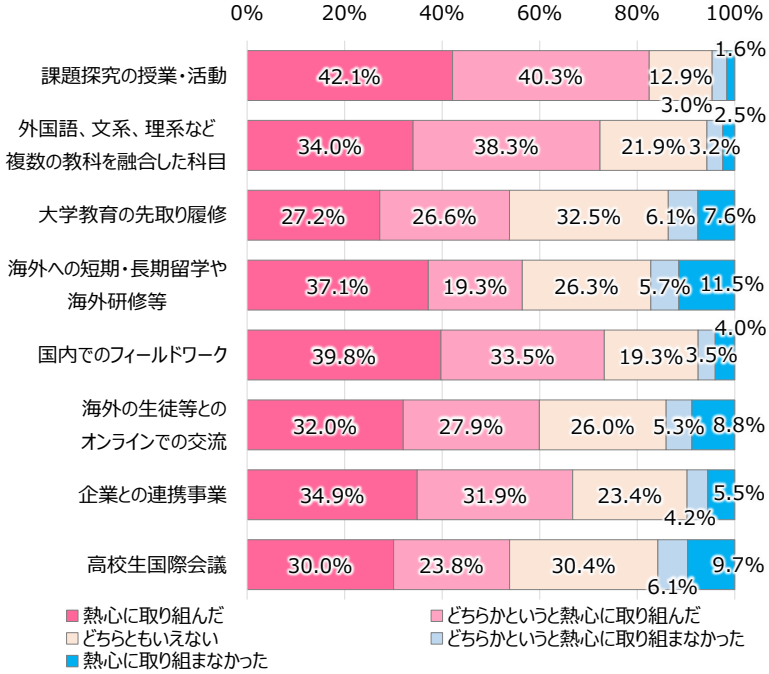


図２ WWL 事業の活動の熱心度（取り組んだ活動のみ）

1-2 WWL 事業の取組みの機会

令和５年度の生徒アンケートにて、WWL 事業の取組みの機会についてきいた。

「外国人教員による授業」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心に実施している割合も高かった。

「日本語以外の言語」で話す・読む・書くについても７割以上が実施。

コロナ禍の影響もあり「海外でのフィールドワーク」は取り組んでいる割合が低かった。

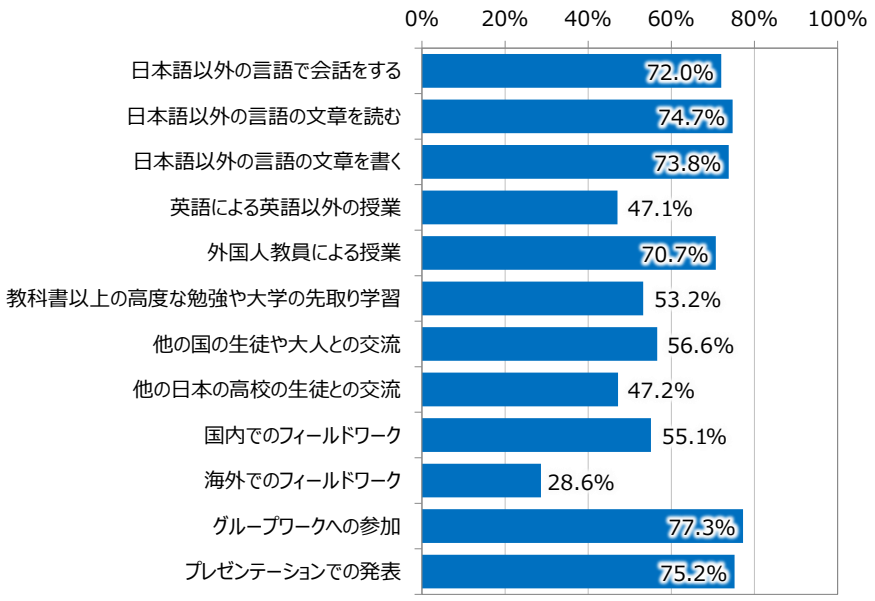


図３ WWL 事業の取組みの機会（複数回答）（n=13,987）

1-3 WWL のテーマ

令和５年度の学校アンケートおよび生徒アンケートにて、WWL 事業のテーマについてきいた。

学校アンケートにて、WWL 事業におけるカリキュラム開発において設定していたテーマの分野をきいた。

最も割合が高い分野は「SDGs」で、87.9%の拠点校がテーマとして設定していた。

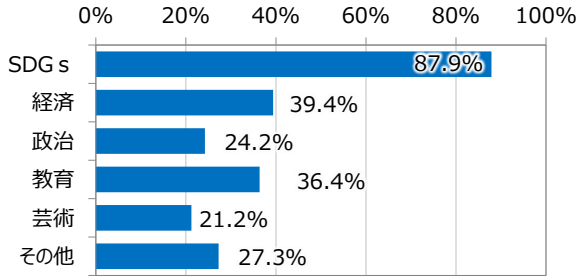


図４ カリキュラム開発において設定していたテーマの分野（複数回答）（n=33）

生徒アンケートにて、WWL 事業のテーマの満足度についてきいた。

５割以上の生徒が「満足している（満足している＋どちらかというと満足している）」と回答した。

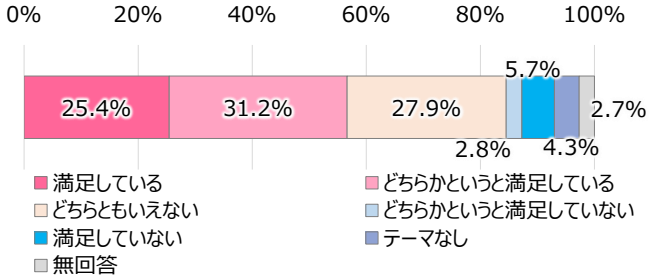


図５ WWL 事業テーマの満足度（n=13,987）

1-4 WWL 総合熱心度・満足度

令和５年度の生徒アンケートにて、WWL 事業の熱心度と満足度についてきいた。

総合的にみて WWL 事業に熱心に取り組んだかをきいたところ、63.0%の生徒が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ＋どちらかというと熱心に取り組んだ）」と回答した。

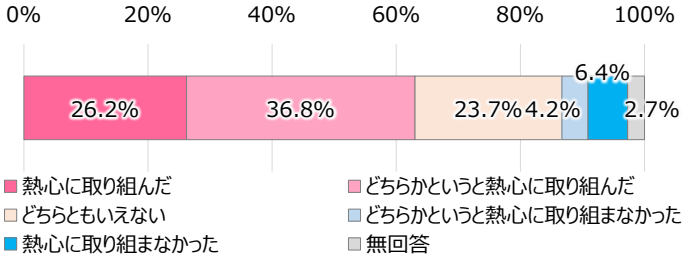


図６ WWL 総合熱心度（n=13,987）

また、総合的にみて WWL 事業に満足しているかをきいたところ、62.5%の生徒が「満足している（満足している＋どちらかというと満足している）」と回答した。

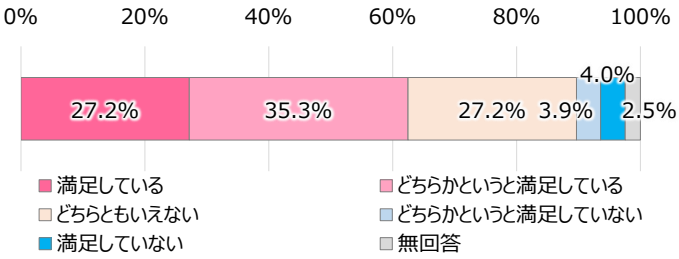


図７ WWL 総合満足度（n=13,987）

1-5 日本への関心

令和５年度の生徒アンケートにて、日本への関心についてきいた。

９割が「日本について知ること・学ぶことは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答。他の２項目でも８割以上が「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した。

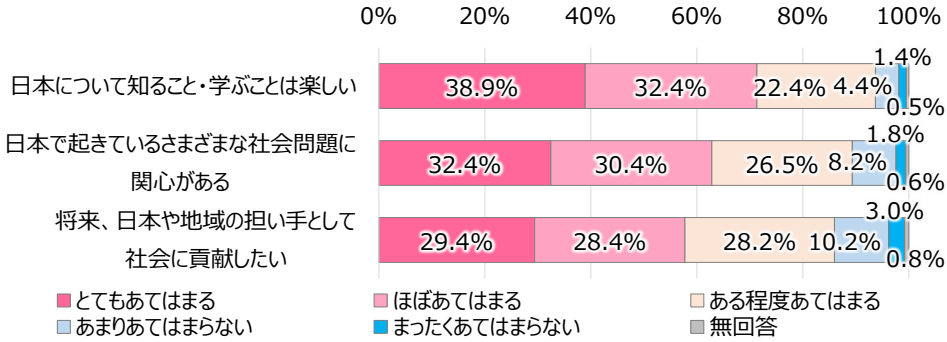


図８ 日本への関心（n=13,987）

2. 生徒の成長

2-1 生徒の成長実感

令和５年度の生徒アンケートにて、WWL 事業を含め高校生活を通じて身についたこと・成長したことについてきいた。

「海外や国際的な課題に対して関心を持った」「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」などが４割ほどと、WWL 事業等を通じて生徒の世界や視野が広がっている様子が伺える。

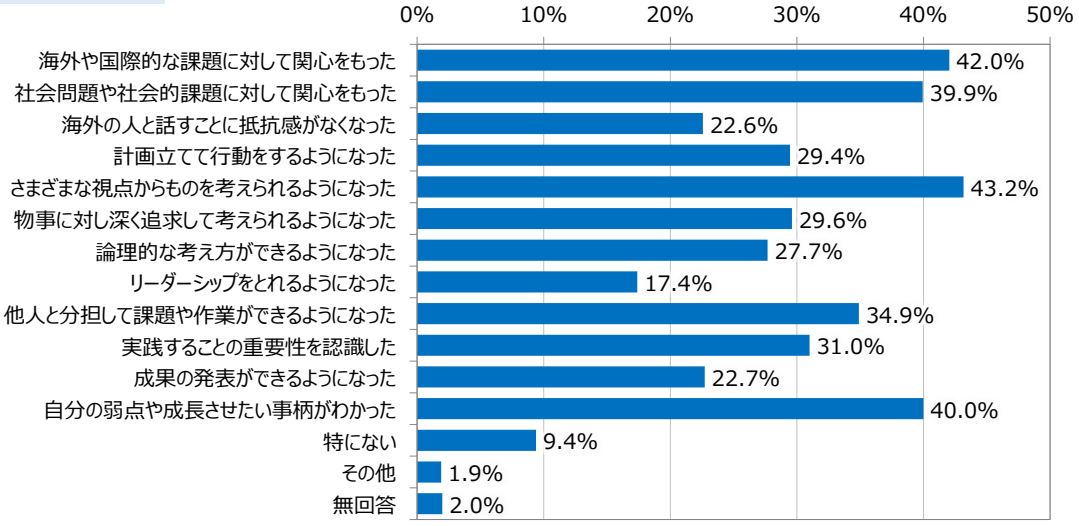


図９ 高校生活を通じて身についたこと･成長したこと（複数回答）（n=13,987）

2-2 教員から見た生徒の成長

令和５年度の教員アンケートにて、WWL 事業の学校への影響や変化についてきいた。

教員が「あてはまる（あてはまる＋どちらかというとあてはまる」と回答した項目は、「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」が８割前後、「生徒の思考力・表現力・判断力が向上した」「生徒の学びへの意欲が向上した」が７前後と、教員の目から見ても生徒の意欲・関心や能力が高まっている。

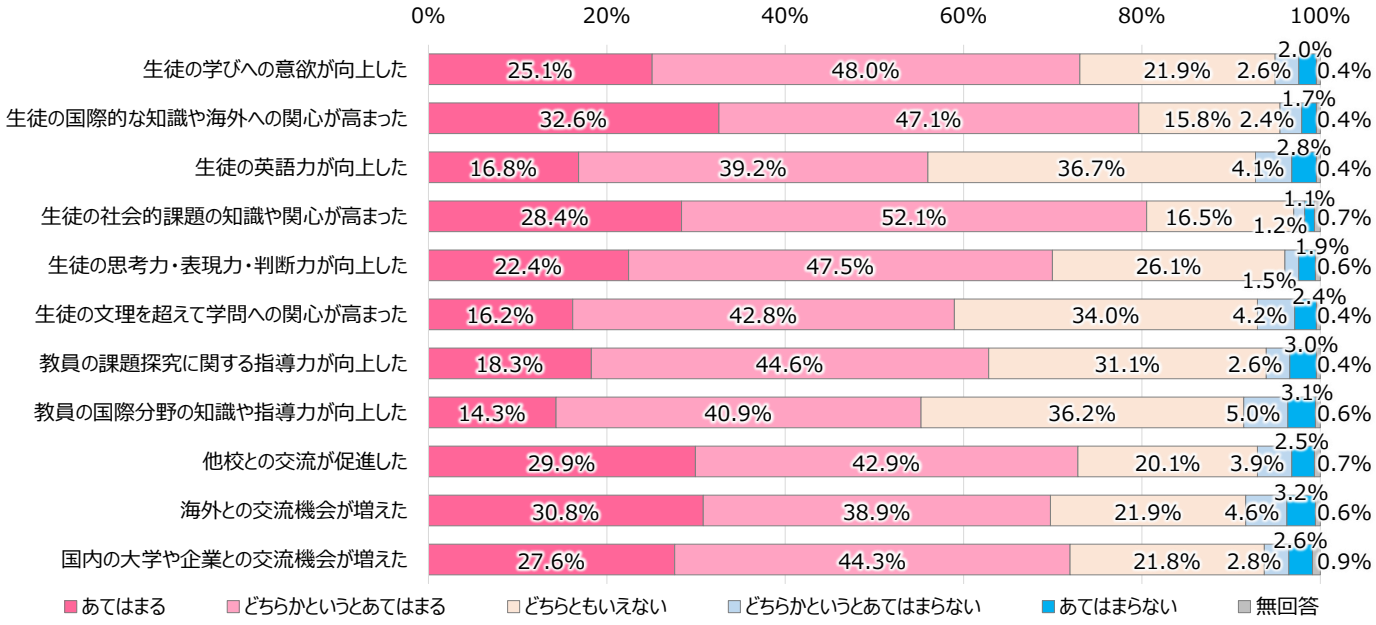


図 10 WWL 事業の学校への影響や変化（n=909）

2-3 分析の枠組み

WWL 事業の成果目標として、「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」が挙げられている。生徒アンケートにおける下記項目により、WWL 事業参加生徒のこれらの項目の達成度を分析する。

	グローバル・マインドセット		グローバル・コンピテンシー		PPDACスキル
	グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）	グローバルコンピテンス（グローバル思考）	異文化対応コンピテンシー	外国語リテラシー	PPDACスキル
出典	OECD-PISA2018	OECD-PISA2018	筑波大学SGH事業調査	-	筑波大学SGH事業調査
質問文	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(4段階)	あなたは、文化の違いから生じる、困った(困惑した)出来事(例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い)に直面した際、その解決のため、以下に挙げる行動をとれると思いますか。(6段階)	次のことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	あなたは、学校のグループワークや総合的な探究(学習)の時間」での課題を解くときに、次のようなことができますか。(6段階)
項目	同じ人間として他の文化の人々を尊重する	自分自身を地球市民として考えている	必要ならば、最初に決めたことを変える	外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる
	文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	日本語以外の本やインターネットを読むことができる	問題の重要度の根拠を見つけることができる
	他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	複数の視点から問題の原因を考える	外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる
	異なる文化の人々の価値観を尊重する	劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	複数の選択肢を考える	英語でメールや文章が書ける	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる
	異なる文化の人々の意見を大切にする	世界の問題について、自分は何かできる	相手が意見を述べやすいように心がける	社会問題などについて英語でディスカッションできる	問題解決に向けて仮説を立てることができる
		地球環境について、気にかけることは重要である	相手との協力関係を築くように心がける		問題解決に合ったデータや情報を選択できる
			反対意見にも耳を傾ける		集めたデータや情報の正確さがわかる
					分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
					提案を適切にプレゼンテーションできる
					自分の発表に対する質問に適切に回答できる

図 11 分析フレーム

学校成績と各能力の相関関係

成果目標の各能力と学校成績との相関関係をみると、5つの項目は能力同士、4分野の成績は成績同士で相関が高い。一方で、各能力と成績との間には緩やかな相関関係であった。英語と外国語リテラシーの相関係数はやや高いものの、数学理科の成績は、各能力との相関関係は低めであった。すなわち、WWL 事業で育成を目指している能力は、(外語学リテラシーなど共通項はあるものの)いわゆる教科教育で学び育む認知能力とは、別の軸で育成・評価すべき能力だといえる。

	英語	国語社会	数学理科	芸術	多文化の人々の尊重	グローバル思考	異文化対応コンピテンシー	外国語リテラシー	PPDAC
英語		.580**	.483**	.248**	.138**	.171**	.148**	.371**	.180**
国語社会	.580**		.366**	.315**	.134**	.079**	.142**	.135**	.170**
数学理科	.483**	.366**		.190**	0.010	0.031	.042*	.058**	.092**
芸術	.248**	.315**	.190**		.136**	.123**	.142**	.094**	.111**
多文化の人々の尊重	.138**	.134**	0.010	.136**		.483**	.711**	.330**	.502**
グローバル思考	.171**	.079**	0.031	.123**	.483**		.520**	.467**	.532**
異文化対応コンピテンシー	.148**	.142**	.042*	.142**	.711**	.520**		.326**	.570**
外国語リテラシー	.371**	.135**	.058**	.094**	.330**	.467**	.326**		.517**
PPDAC	.180**	.170**	.092**	.111**	.502**	.532**	.570**	.517**	

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）。

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）。

図 12 学校成績と各能力の相関関係（令和４年度）

2-4　1年生から3年生にかけての成長

令和３～５年度の生徒アンケート結果について、５つの項目（図 11）を 0～10 点で点数化し、１年生から３年生にかけての変化をみた。

いずれの項目も、１年前期と比較して３年後期までに点数が高くなり、３年間での成長がみられる。特に「外国語リテラシー」については６回の調査で大きく上昇している。「PPDAC スキル」については、学年が上がるタイミングでの上昇が大きい。

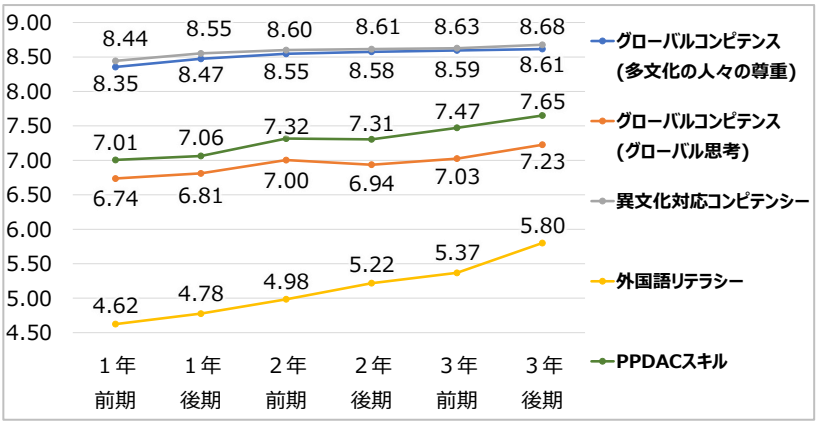


図 13　５つの項目の変化（アンケート４回参加２年生　n=1,781）

また、高校生活を通じて身についた・成長したと思うことについて、３年間の結果を比較した結果、１年生の時と比較して、３年生の時には「リーダーシップをとれるようになった」「成果の発表ができるようになった」と回答する生徒の割合が大きく増加している。「物事に対し深く追求して考えられるようになった」も３年生で割合が高くなっている。WWL 事業を通じて、リーダーシップ、プレゼンテーション力、思考力などの力が伸びていることが伺える。

一方で、「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」については、１年生から３年生にかけて低下していることから、１年生の段階では自分の課題をみつけ、その後次の段階へと移っていった生徒が一定数いることがわかる。

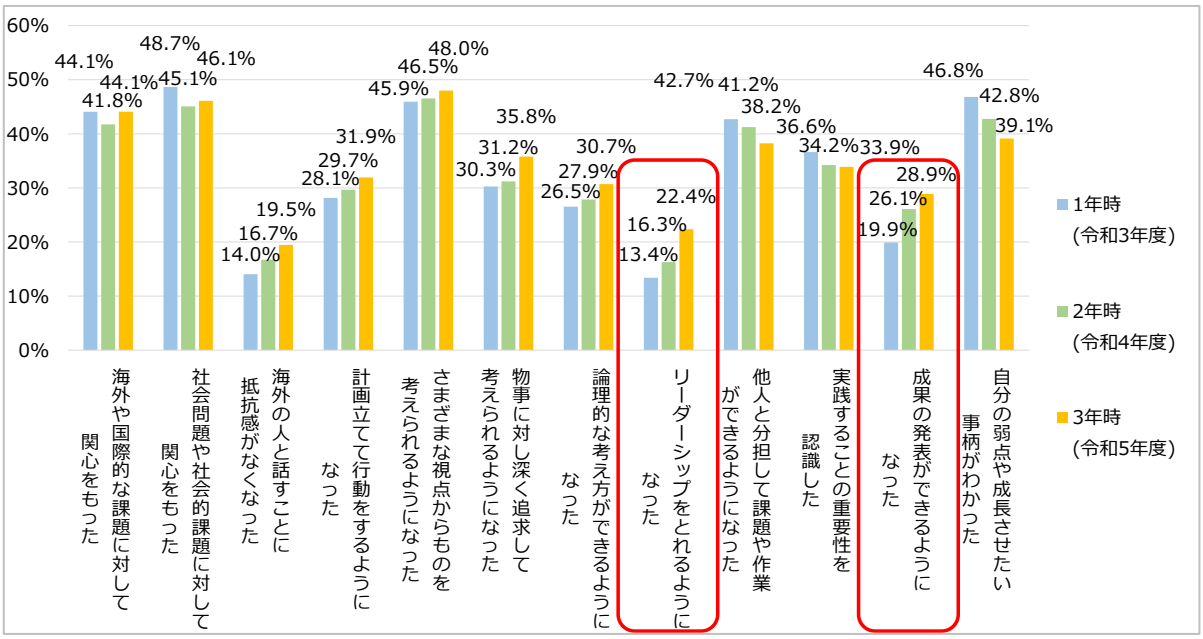


図 14　高校生活を通じて身についた･成長したと思うこと（アンケート６回参加３年生　n=1,781）

さらに、将来に対する考え方について「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる）」の割合を、３年間の結果で比較した。

その結果、いずれの項目も３年生で「あてはまる」割合が１、２年生の時と比較して大きい。WWL 事業を通じて成長し、進路選択など将来のことを考える機会が増える３年生において、海外志向やリーダーとして将来活躍するといった志向が高まるのではないかと考えられる。

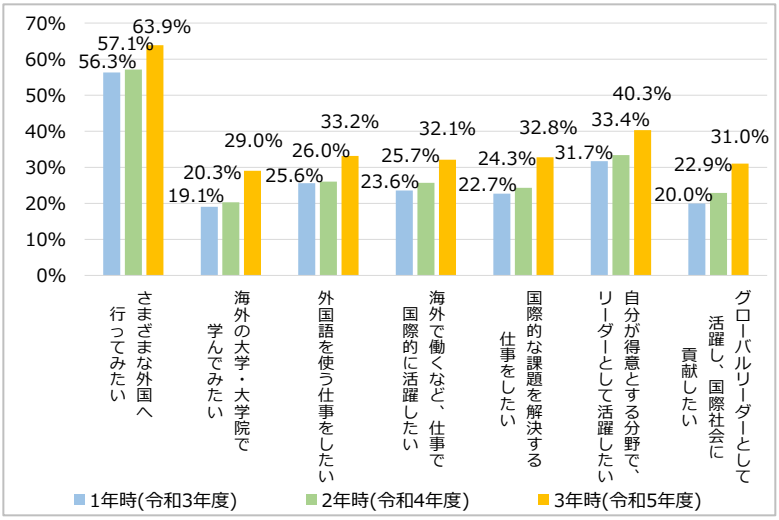


図 15　将来に対する考え方（とてもあてはまる＋ほぼあてはまるの割合）
（アンケート６回参加３年生　n=1,781））

2-5 WWL 事業参加生徒以外との比較

令和３～４年度の生徒アンケート結果について、拠点校の WWL 事業参加生徒【対象者】と、拠点校（公立校）のある地域の拠点校以外の公立高校【非参加校】の生徒の比較をみた。1、２年生を対象とした。

５つの項目（図 11）を 0～10 点で点数化して比較を行った。いずれの項目も対象者の数値が高く、高くなっている。特に、「外国語リテラシー」の差が大きい。

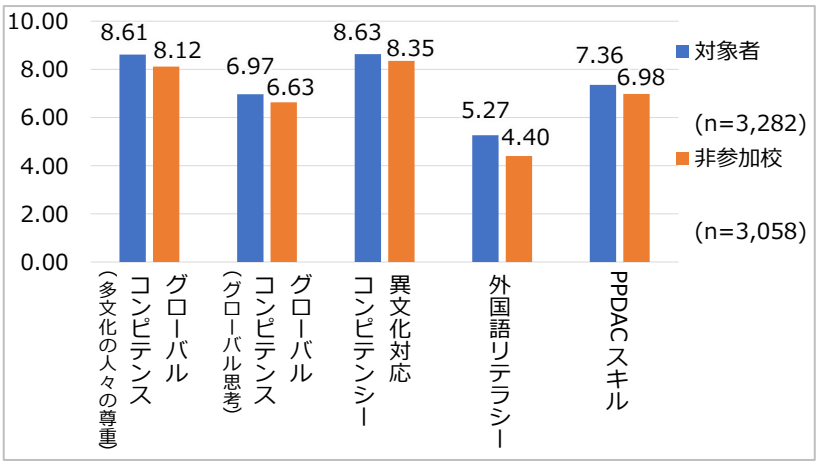


図 16　５つの項目の比較

（参考）5つの項目以外の比較

拠点校と拠点校以外の学校では、学校の成績、勉強時間とも大きな違いはなく、同様の性質の学生との比較となっている。

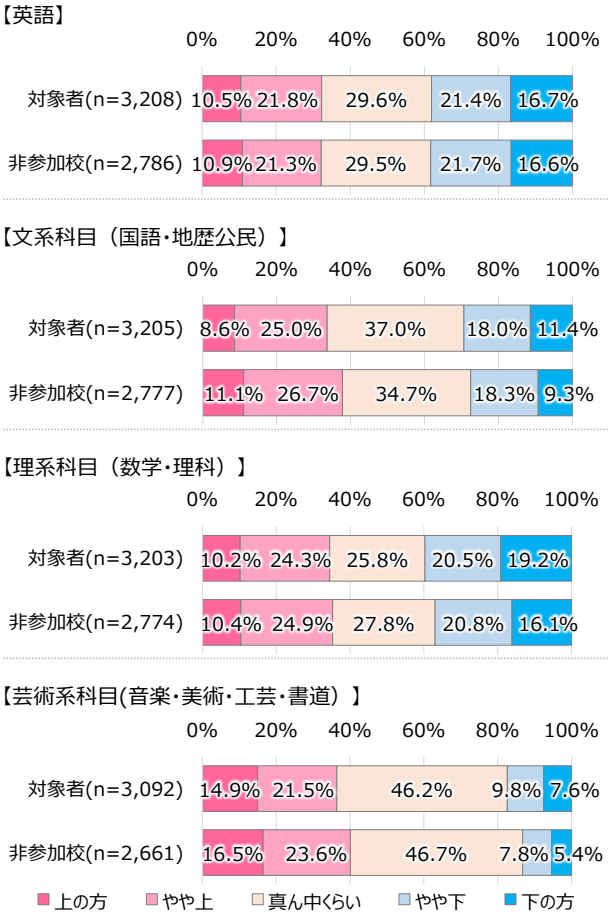


図 17　成績の比較

成績の比較

学校の成績について、「英語」・「文系科目（国語・地歴公民）」・「理系科目（数学・理科）」・「芸術系科目（音楽・美術・工芸・書道）」でそれぞれ比較した。

「上の方（上の方＋やや上）」と回答した生徒について、「英語」は、対象者がわずかに多いが、他の科目は非参加校の生徒の方が多かった。

勉強時間の比較

１日あたりの勉強時間【平日】【休日】について、いずれも非参加校の生徒の勉強時間がわずかに長かった。

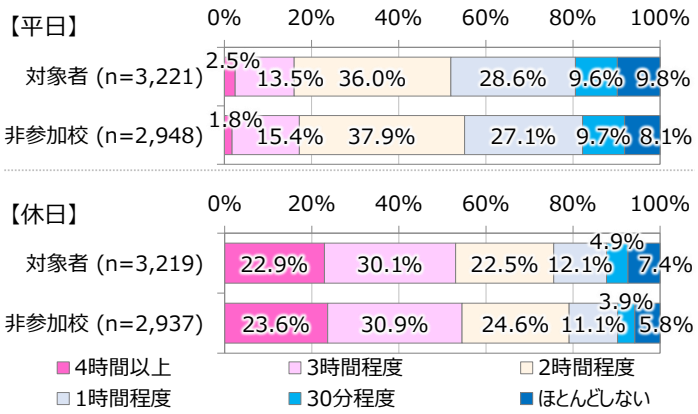


図 18　勉強時間の比較

2-6 熱心度との関係

WWL 事業への取り組み方で生徒の成長度合いも変わってくると考えられる。そこで、WWL 事業に対する取組の熱心度別に 5 つの項目（図 11）の変化をみる。WWL 事業への熱心さで生徒を次の４グループに分類した。

・ずっと熱心（１年次から２年次まで熱心に活動）
・熱心になった（１年次は熱心ではないが、２年次は熱心に活動）
・熱心でなくなった（１年次は熱心に活動していたが、２年次では熱心でない）
・ずっと熱心でない（１年次も２年次も熱心に活動していない）

その結果、「ずっと熱心」な生徒は、５項目の得点が高く、かつ１年生から２年生にかけて５つの項目が伸びている。一方で「ずっと熱心でない」生徒は、５項目の得点が低く、１年生から２年生にかけての変化も小さい。

「熱心になった」生徒と「熱心でなくなった」生徒については、１年生の前期では、５項目の得点が同程度であった。２年生になると「熱心になった」生徒は得点が伸びたのに対し、「熱心でなくなった」は横ばい、あるいは一時的に低下している。

これらの結果より、グローバル・マインドセット/コンピテンシーや PPDAC スキルのような能力が育成されるは、生徒自身が熱心に（主体的に）取り組むことが重要だと推察される。

ただし、５項目のうち、外国語リテラシーや PPDAC スキルについては、熱心度が低くても、ゆるやかではあるが上昇傾向がみられる。WWL 事業は、熱心に取り組めていない生徒に対しても一定の教育効果はあることがわかる。

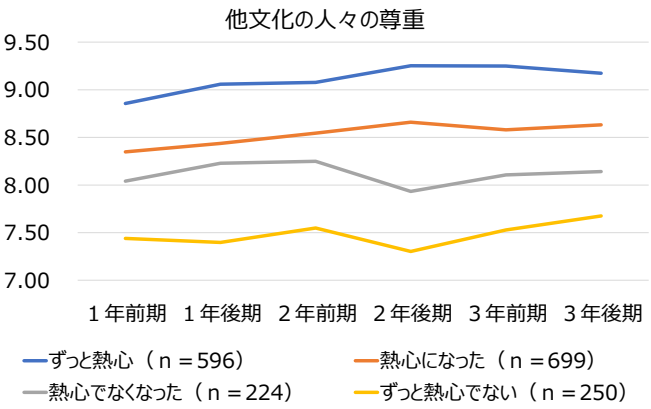


図 19 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

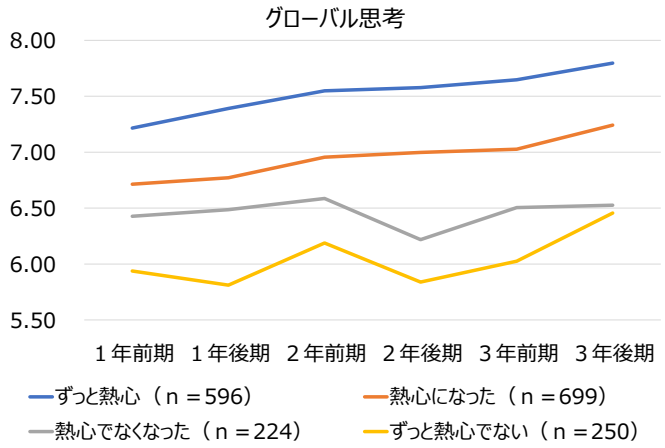


図 20 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

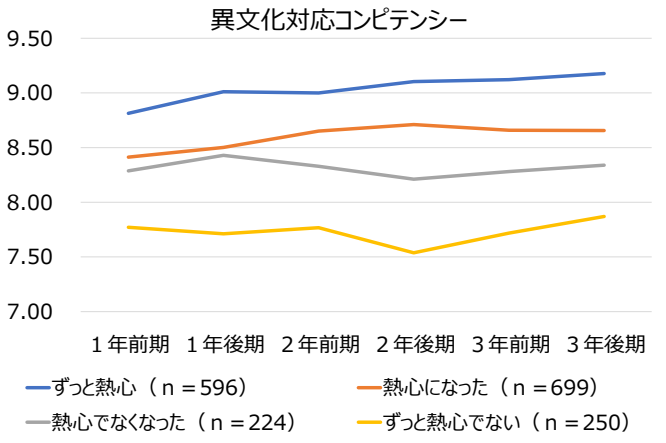


図 21 異文化対応コンピテンシー

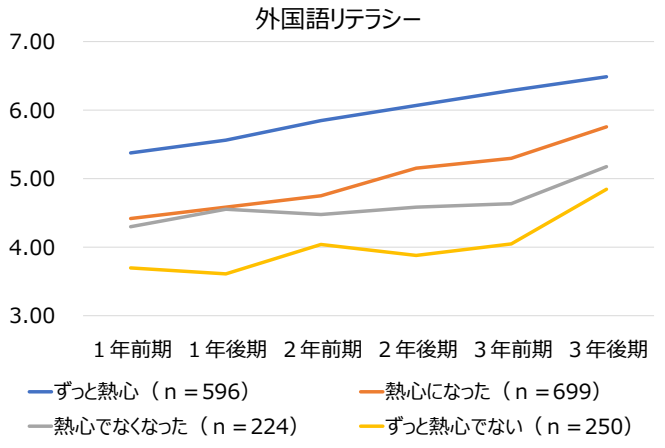


図 22 外国語リテラシー

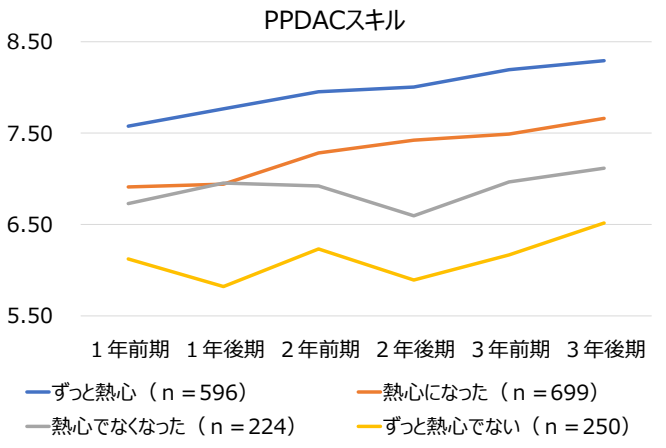
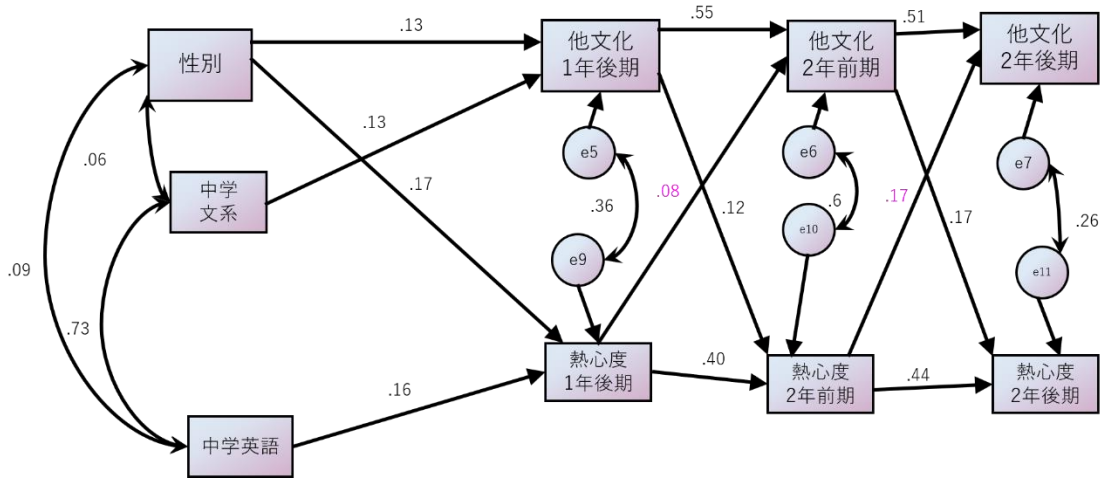


図 23 PPDAC スキル

ここまでの結果は「能力の高い生徒ほど、熱心に活動を行っている」ことを示しているだけかもしれない。そこで、「能力」と「熱心さ」はどのような関係にあるのかを、2 つ以上の変数間の相互作用を検証するためのモデルである「交差遅延効果モデル」を用いて分析する。

その結果、「能力」は「熱心さ」に正の影響を及ぼし、「熱心さ」は「能力」に正の影響を及ぼしていた。１年生の段階では「能力⇒熱心さ」の係数が大きいことから、「能力の高い生徒が、より熱心に活動を行う」傾向が強いものの、活動が進むにつれ「熱心に活動を行う生徒の能力が高まる」「能力の高い（高まった）生徒が、より熱心に活動を行う」ことの循環がなされるようになっている。熱心に取り組む生徒ほどスキルが高くなり、スキルが高い資質・能力生徒ほど熱心に取り組むという相互作用が確認された。

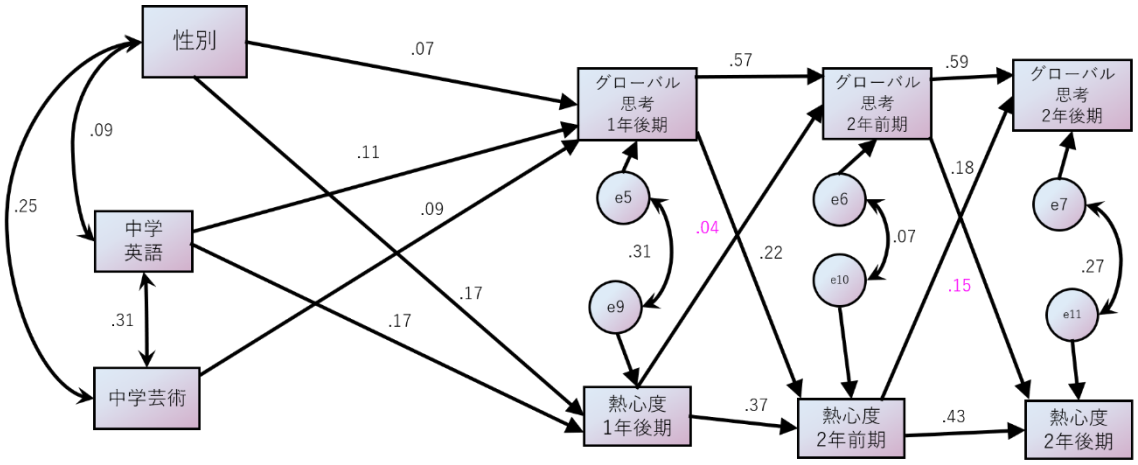
■他文化の人々の尊重　※赤字が熱心⇒スキル



GFI=.961
RMSEA=.101

図 24　グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

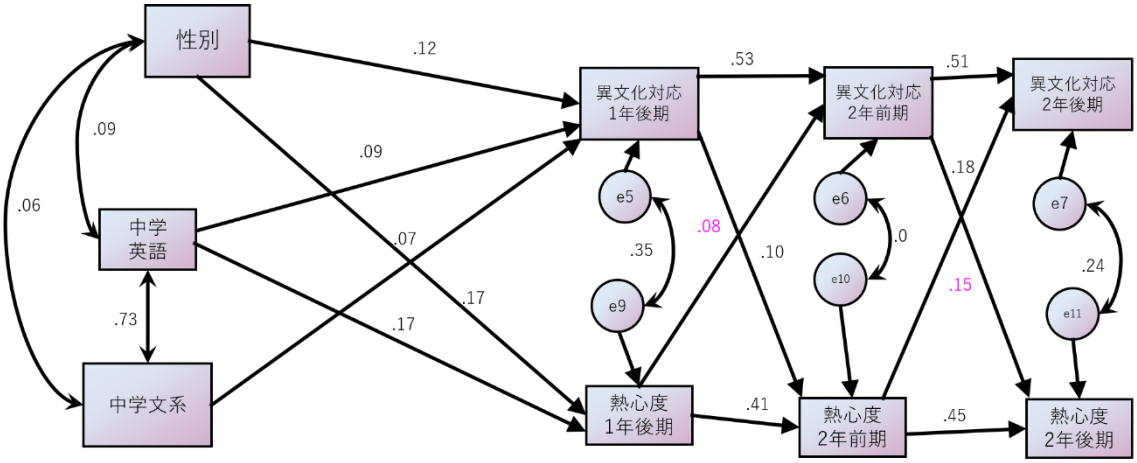
■グローバル思考



GFI=.949
RMSEA=.120

図 25　グローバルコンピテンス（グローバル思考）

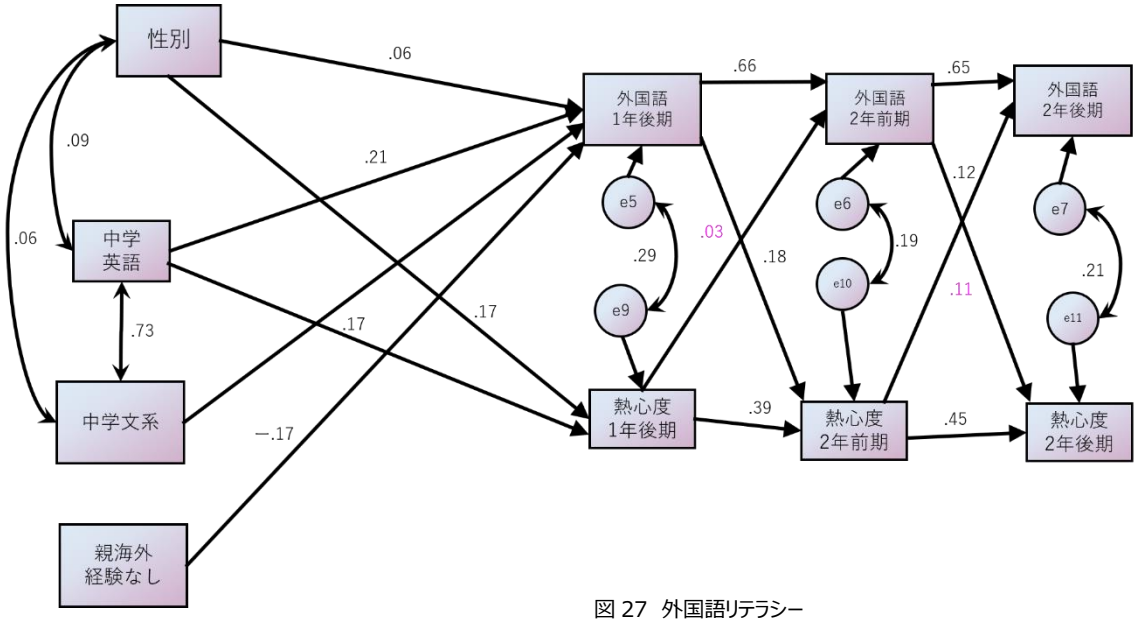
■異文化対応コンピテンシー



GFI=.961
RMSEA=.103

図 26　異文化対応コンピテンシー

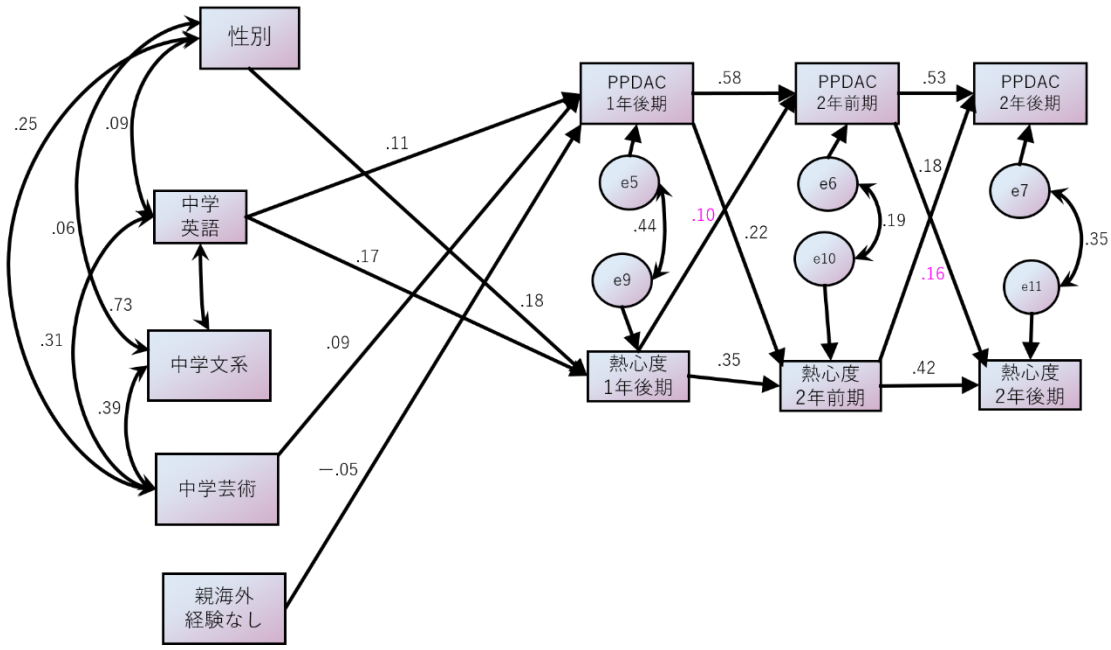
■外国語リテラシー



GFI=.945
RMSEA=.105

図 27　外国語リテラシー

■PPDAC スキル



GFI=.957
RMSEA=.085

図 28　PPDAC スキル

2-7 熱心度の変化とその要因

では、初期段階でスキル等が低く、熱心でない生徒の成長は見込めないのか。決してそのようなことはなく、外国語リテラシーや PPDAC スキルについては、熱心度が低くても、ゆるやかではあるが上昇傾向がみられた。

また、WWL 事業で困っていること・問題点、「ずっと熱心でない」生徒は、１年生の時と比較して「英語に苦手意識がある」の割合が減っている（図 28　WWL 事業で困っていること・問題点（１年次と２年次の差）参照）。ここからも、熱心でない生徒においても外国語リテラシーは向上していることが伺える。

さらに、取組への熱心度が何と関係しているのかをみることで、熱心でない生徒への対応方法を検討する。

まず、生徒の熱心度の変化について、熱心度別に WWL 事業で困っていること・問題点をみる。

「熱心でなくなった」「ずっと熱心でない」生徒は、他と比べ「WWL 事業の課題が難しすぎる」「WWL 事業のテーマに関心がもてない」が問題だと感じている。さらに、２年生で「熱心でなくなった」生徒は、１年生の時よりも２年生でこの２項目の割合が高くなっている。

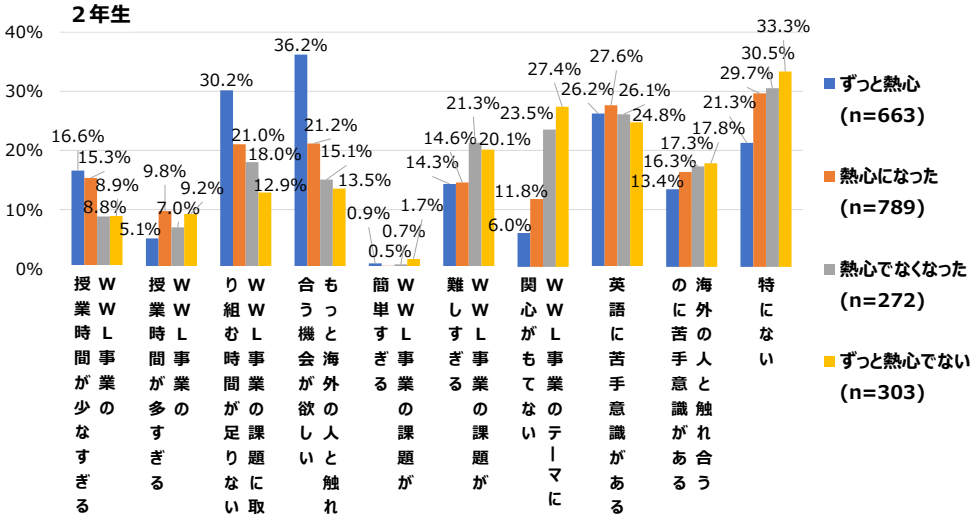


図 29　WWL 事業で困っていること･問題点（２年次）

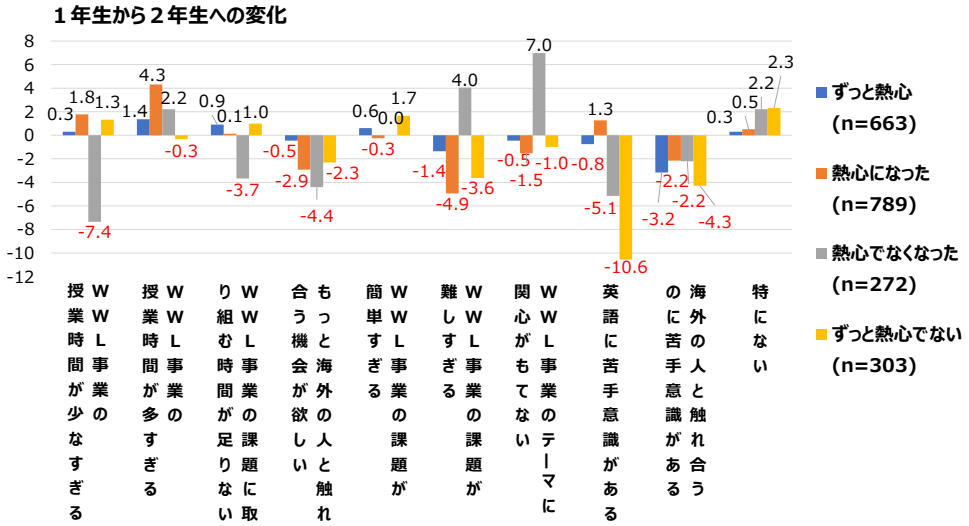


図 30　WWL 事業で困っていること･問題点（１年次と２年次の差）

また、各学校で定めている WWL 事業のテーマについてきいたところ、「熱心になった」生徒はテーマへの満足度が高まっている一方、「熱心でなくなった」生徒はテーマへの満足度が低下している。

WWL 事業への熱心さは、テーマへの関心・満足が要因になっていることがわかる。

これらより、難易度設定も含め、生徒が関心の持てるテーマ設定・課題設定が重要といえる。

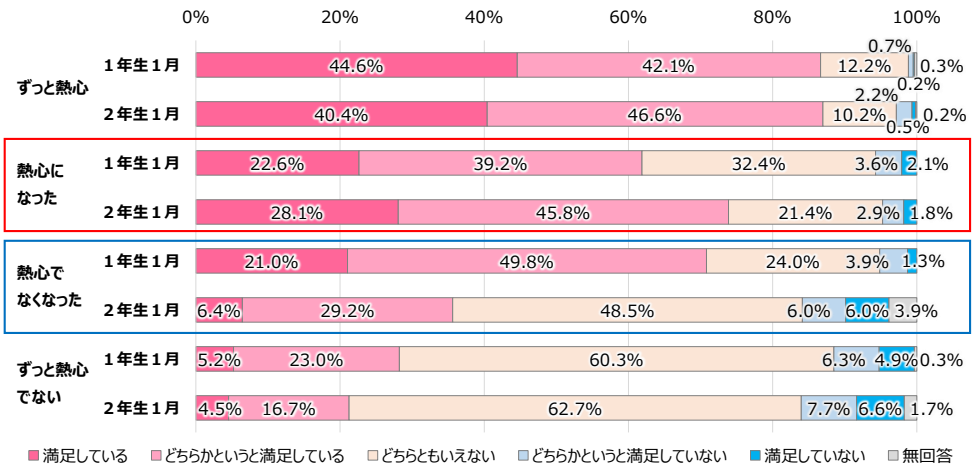


図 31　WWL 事業のテーマの満足度（１年次と２年次の変化）

では、WWL 事業の活動内容と熱心さの関係をみてみる。熱心度別の活動内容をみると、「熱心になった」生徒は１年次と比べ２年次で「他の日本の高校の生徒との交流」「国内でのフィールドワーク」に熱心に取り組む割合が増加している。また、「熱心でなくなった」生徒は、「グループワークへの参加」に対して、特に熱心さが低下していることがわかる。

これらより、生徒のスキルや取組状況によっては、いきなり海外体験や交流を行うのではなく、国内での体験や交流を行い、生徒に適切な刺激を与えることが、課題テーマへの関心を引き出すことにもつながり、生徒が主体的な活動を行うきっかけとなっていることが伺える。

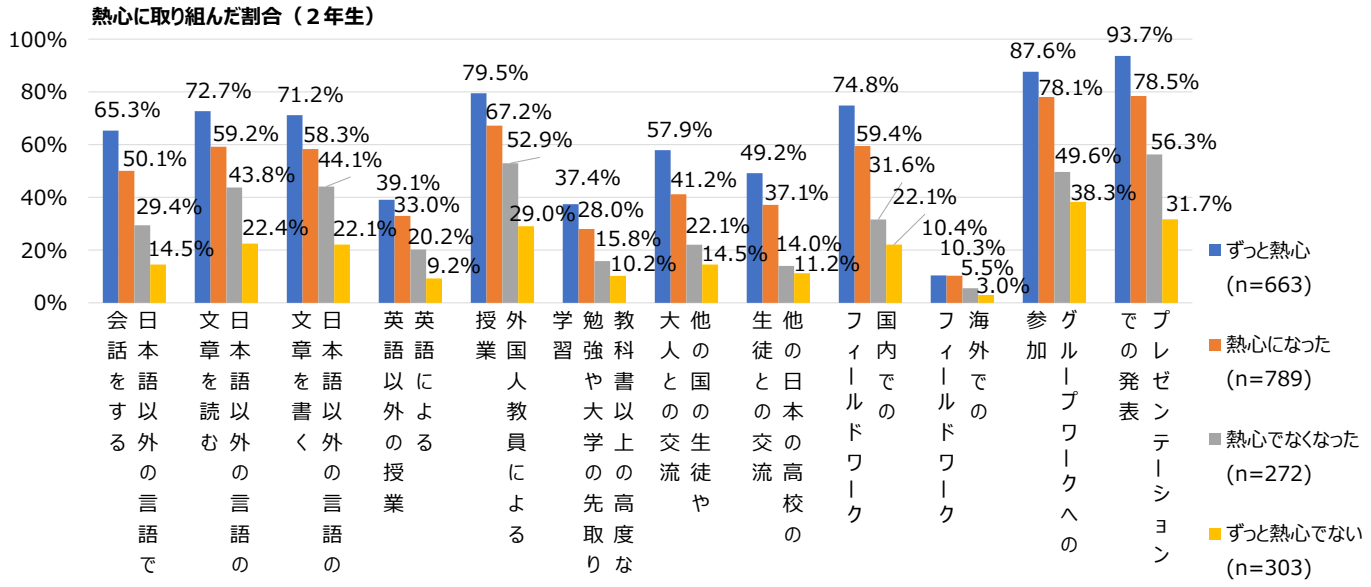


図 32　WWL 事業の活動の熱心度（２年次）

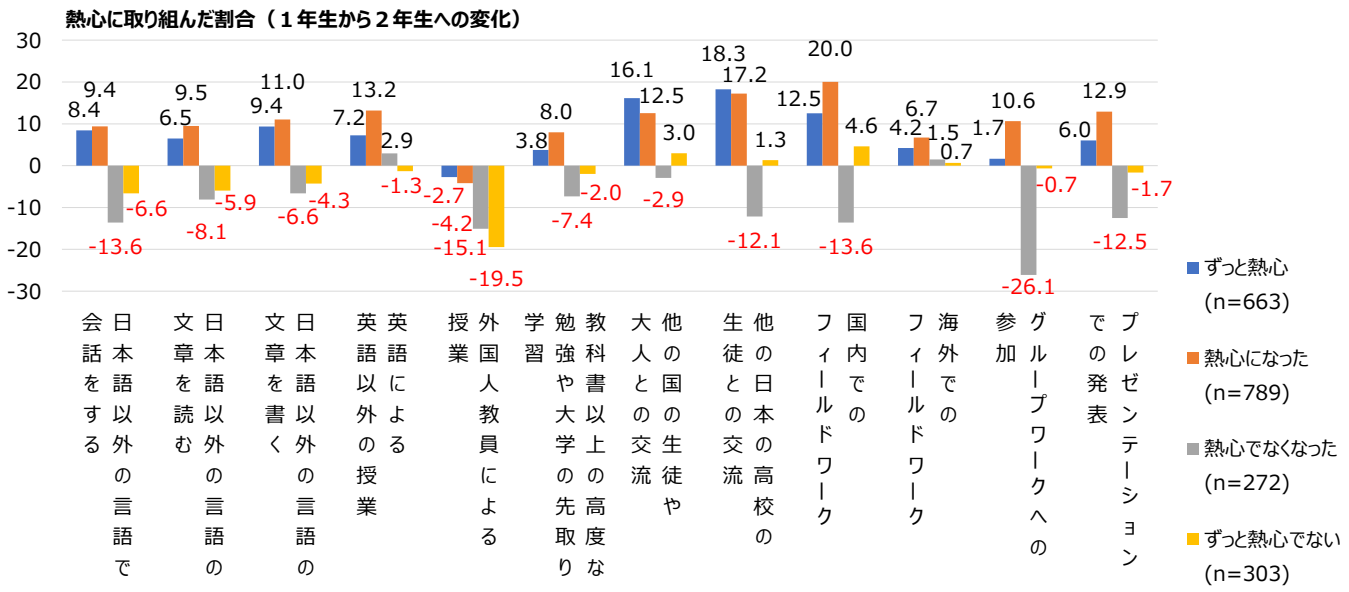


図 33　WWL 事業の活動の熱心度（１年次と２年次の変化）

3. 卒業後の状況

3-1 卒業後の進路選択や、なりたい職業への影響

令和５年度の生徒アンケートにて、高校卒業後の進路選択や将来なりたい職業について、WWL 事業での経験は影響しているかきいた。

43.8%の生徒が「影響している（影響している＋少し影響している）」と回答した。

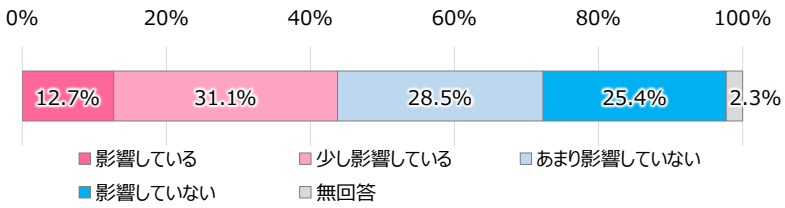


図 34 高校卒業後の進路選択やなりたい職業への WWL 事業の経験による影響（n=13,987）

3-2 現在の生活に役立っている高校時代の経験

令和４年度の卒業生アンケートにて、高校時代の経験が現在の生活に役立っているかどうかきいた。

「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」が、役立っている割合が高かった。

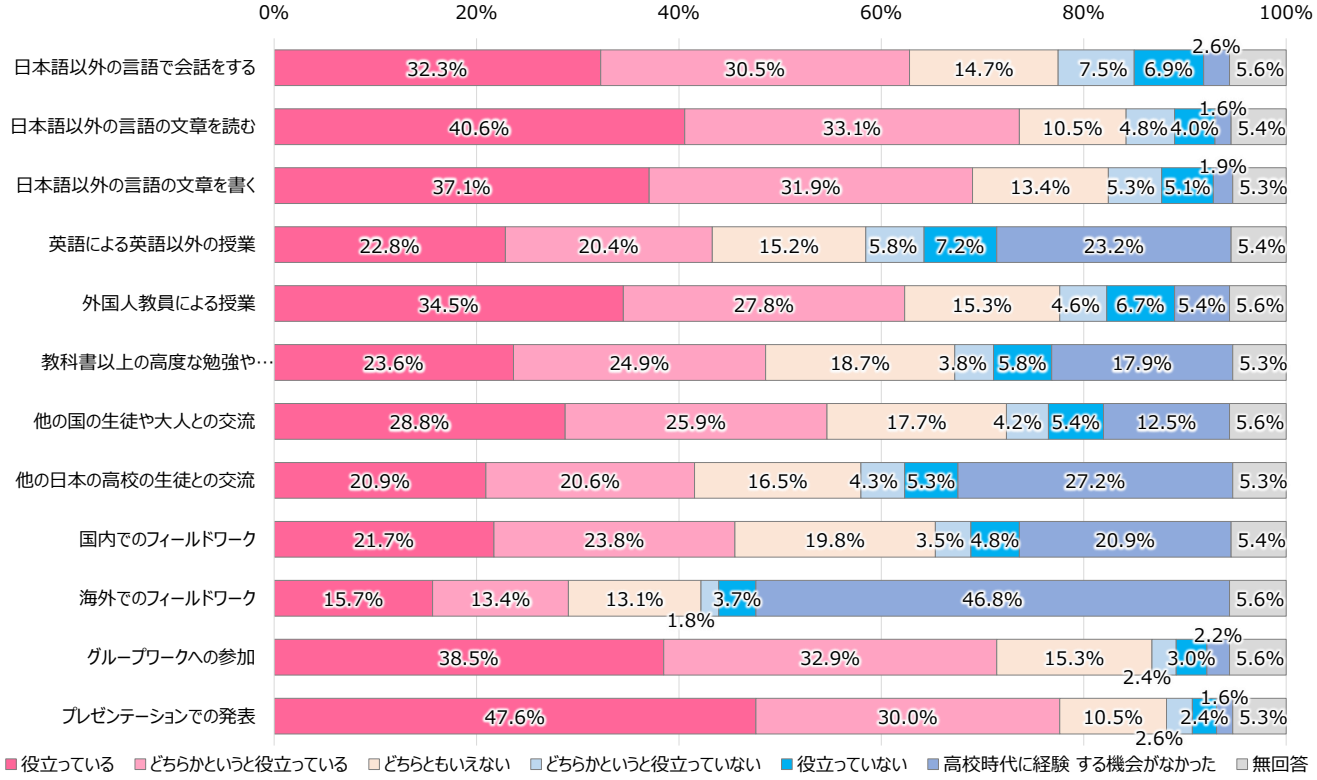


図 35 現在の生活に役立っている高校時代の経験（n=626）

3-3 WWL事業に熱心に取り組むことの効果

WWL 事業への取組みの熱心度によって、高等学校卒業後の影響の差がどの程度あるかを分析するため、令和４年度卒業生アンケートにて特徴をみた。高校時代のWWＬ事業への総合熱心度（５段階）別に比較を行った。

①大学のグループワークやディスカッションに積極的に参加

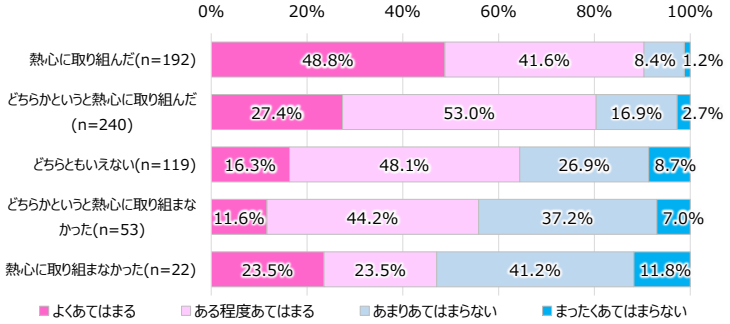


図 36 グループワークやディスカッションに積極的に参加している

大学で、グループワークやディスカッションに積極的に参加しているかきいた。

高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ＋どちらかというと熱心に取り組んだ）」生徒の８割以上が「あてはまる（よくあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した。高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組んだ」生徒ほど、大学でのグループワークやディスカッションに積極的に参加しているといえる。

②正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している

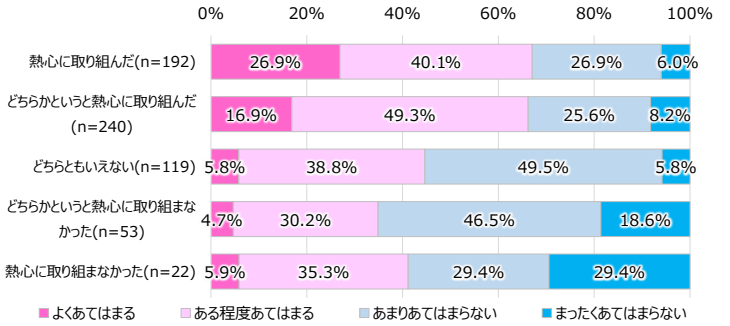


図 37 正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している

大学で、正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加しているかきいた。

高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ＋どちらかというと熱心に取り組んだ）」生徒の６割以上が「あてはまる（よくあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した。高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組まなかった」生徒よりも、「熱心に取り組んだ」生徒の方が、大学で課外活動に積極的に参加していることがうかがえる。

③大学卒業後のやりたいことが明確になっている

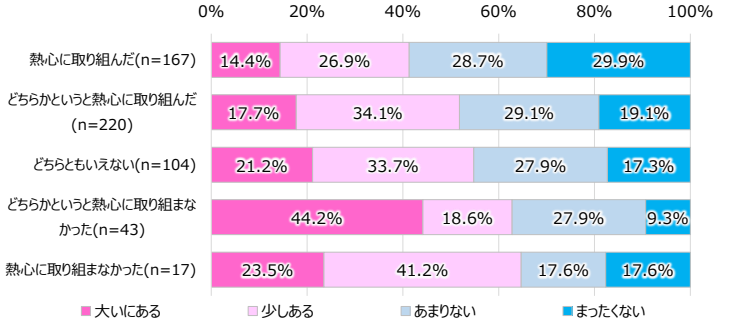


図 38 卒業後にやりたいことがみつからない

大学で学生生活を送る上で、どのような不安や悩みがあるかきいた。

「卒業後にやりたいことがみつからない」という項目について、高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組まなかった」生徒の方が、「熱心に取り組んだ」生徒よりも不安や悩みがあると答えた割合が高かった。高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組まなかった」生徒ほど、大学入学後、卒業後にやりたいことがみつからないという悩みや不安がある。

④グローバルリーダーとして活躍し、国際社会に貢献したい

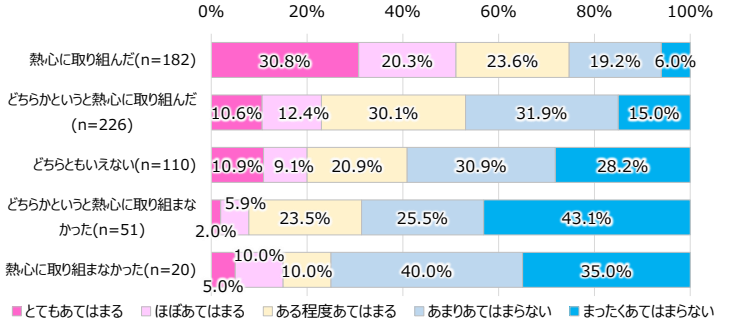


図 39 グローバルリーダーと して活躍し、国際社会に貢献したい

グローバルリーダーとして活躍し、国際社会に貢献したいかどうかきいた。

高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組んだ」生徒の約５割が「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる）」と回答し、もっとも割合が高かった。高校時代に WWL 事業に「熱心に取り組んだ」生徒は、大学入学後、グローバルリーダーとして活躍し、国際社会に貢献したいと考える傾向が高いことがうかがえる。

※各アンケート結果のより詳しいデータについては、文部科学省 HP「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業における EBPM に向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」ページ：https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1412770_00006.htm
「令和５年度調査研究報告書」 第３章～第５章（P.43~） をご参照ください。

第4章
WWL 事業のカリキュラム開発のポイント

Index

本章では、WWL 事業におけるカリキュラム開発のポイントについて、5つの取り組みとその体制づくり、あわせて6つのカテゴリに分けてご紹介します。

p.100 探究型学習の POINT

p.101 外国語や文理等の融合科目の POINT

p.102 高大連携・先取り履修の POINT

p.102 海外研修・交流の POINT

p.103 高校生国際会議の POINT

p.104 体制づくりの主な POINT

探究型学習の POINT

① 課題・問題を見つけるための POINT

カリキュラム開発拠点校では、生徒が課題・問題を見つけるための工夫として「生徒が自分のことから考えるように促す」「様々な社会的課題について触れる機会をつくる」「生徒が繰り返し考えるように働きかける」「高大接続の利用（大学の教員による指導等）」「探究型学習に関する市販の教材の活用」などを行っていた。

POINT 1
生徒が自分のことから考えるように促す

SDGs に絡めるべきとすれば、探究が終わったあとが良いと考えている。より良い持続的な社会を生徒が主体となって作るとした際、その視点に SDGs は当然含まれてくる。生徒に SDGs を最初から提示し過ぎると、生徒はどうしてもその中から選んで調べ学習的になってしまい、探究が深まるといった感じがしない。生徒たちが幅広い視点を持ち、本当に真剣に考えたテーマの中から活動を起こしていくことによって、「こんなことが SDGs と繋がっているのか」と気付きを得る。そのほうが本物の探究が作れていくのではないかと考えている。

POINT 2
様々な社会的課題について触れる機会をつくる

教員個人の力量で指導に差がでないよう、様々な社会的課題について知る機会を、1 年次に設けている。「グローバルライフ」の授業では、「持続可能な社会を作る担い手になる」という社会的な課題を家庭科の視点から考える機会としている。また、年度末の国内外のフィールドワークによって探究力を身に付けてから、2 年次の課題研究活動に向かうという流れを作っている。

テーマ設定は難しいものである。テーマを見つけるために大事なことは、本物と出会うこと・人生に残るような原体験をすること、この二つが外せないと考えている。そのため、講演などのテーマとの出会い・体験の機会を作っている。

POINT 3
生徒が繰り返し考えるように働きかける

いきなりグローバルと言われてもピンとこず、思った以上に生徒が苦労している印象がある。テーマが決まらない生徒にはひたすら面談を繰り返している。生徒の興味を引き出す面談をする。

POINT 4
高大接続の利用

高校 3 年次は、一人 1 テーマを持って卒業研究に臨む。一部の生徒は、そのテーマに関連する研究を行う大学の先生と繋ぎ、研究のブラッシュアップを図っている。例えば農業であれば、大学農学部のセンターで農業の実習を継続的に行っている。

② 課題・問題を探究する姿勢を身に付けるための POINT

生徒が課題・問題を探究する姿勢などを身に付けるための工夫としては、「生活や社会との繋がりを考えさせるようにする」「焦らず時間をかけた指導を行う」「基本的な勉強を行った上で、課題探究に移る」「同級生や先輩たちの活動する姿を見せる」などを行っていた。

POINT 1
生活や社会との繋がりを考えさせるようにする

「自分たちが探究しているテーマが、社会とどう繋がるか」という点を、生徒自身が考えるよう促している。はじめは、自分たちで社会に働きかけるということが難しい生徒もいたが、だんだんと自分から考えて取り組む生徒が増えた。

苦労したこと

教員によっては、生徒への手の貸し方苦労していた。どうしても教えたくなってしまう。ただ横を走ったり、押したり、遠くから見守ったりと、伴走の仕方にもいろいろあると思う。生徒が自走できるまで、どう伴走するか、距離感が難しい。教えたくなる気持ちをどう我慢するかがポイントである。

POINT 2
焦らず時間をかけた指導を行う

2 年生はテーマ設定の 1 年間としている。「論文からテーマを設定する」「自分でプロジェクトを企画してテーマを設定する」「進路探究の中からテーマを設定する」の 3 つのステップに分けて、それらを合わせた上で次年度のテーマを決める。学校側がいろいろな玉を投げて、どれかが生徒にヒットするといった形でテーマ設定に取り組んでいる。

苦労したこと

テーマ設定は非常に大事で難しいことなので、こだわって時間をかけるようにしている。背景やエビデンスが明確でないまま研究を進めても、どこかで崩壊する。そのため、途中で大きくテーマを変えても良いことにしている。

POINT 3
基本的な勉強を行った上で、課題探究に移る

1 年生の取組みから徐々に 2 年生の探究活動へ移っており、いきなり何かテーマを決めて調べさせているわけではない。1 年間しっかり取り組むことで動機付けになり、2 年生の探究活動や最後の発表に繋げられると思う。

POINT 4
同級生や先輩たちの活動する姿を見せる

フォーラムなどでの先輩の活動を後輩が見る機会を設け、下級生に「来年は、自分たちも先輩のような活動をする」と認識させている。良い影響を与えることが出来ていると思う。

生徒の関心テーマ

生徒アンケートにて、日本について関心がある分野についてきいた。また、目指している進学先(3 分類)別に比較を行った。

3 分類とも「アニメ・漫画などのサブカルチャー」が最も割合が高かった。そのほか、分類ごとに割合が高かった分野は下記の通り。

	文系・理系に関わらず幅広く学べる大学・学部	主に文系分野を学べる大学・学部	主に理系分野を学べる大学・学部
1位	アニメ・漫画などのサブカルチャー	アニメ・漫画などのサブカルチャー	アニメ・漫画などのサブカルチャー
2位	スポーツ	歴史	医療
3位	教育	経済・産業	技術・開発
4位	経済・産業	政治	スポーツ
5位	芸術	スポーツ	自然

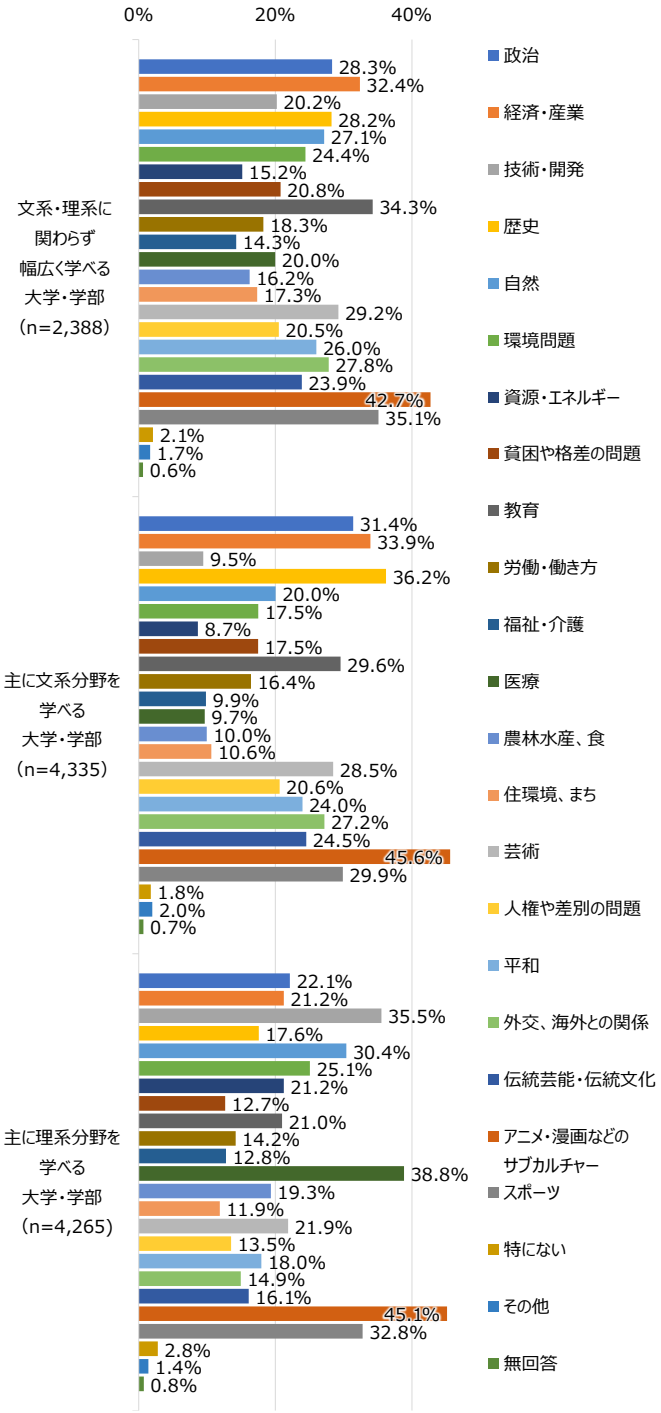


図　令和５年度　関心がある分野（目指している進学先別）

外国語や文理等の融合科目の POINT

外国語や文理の教科を融合した教科・科目においては、融合する教科を担当する教員同士でアイディアを出し合いながら、新たな科目を作っているケースが多かった。

授業のテーマについて、生徒の視点に立ち、興味関心をひくものにする工夫が行われていた。また、授業のアウトプットを工夫することで、新しい知識を得ようとする意欲を高めているケースもあった。

POINT 1

教員同士の話し合いでカリキュラムを作成

グローバル平和探究の授業は地歴公民・英語・理科・数学が入れ替わって授業を行っている。グローバル平和探究の主担当者が地理教師であるため、地理から社会課題を見るという授業を行っている。例えば、他教科の教員に、人口問題や気候問題に他の教科がどう絡むことができるか意見をもらった。その際、地理教師の立場で「こうしてください」と要求するのではなく、「人口問題に対して理科はどう入れますか」「数学ではどのように関われますか」と、他の教科から提案してもらうようにした。

POINT 2

生徒の視点に立った授業のテーマ設定

英語・地歴公民の教員が組んでいる融合型授業では、環境問題を考える中で、「環境問題にはこういうものがある」と話をするのではなく、「発展途上国がどのような状況にあり、我々の生活にどう影響を与えているのか」という視点で授業を行っている。

POINT 3

アウトプット(課題・成果物)を工夫することで、学ぶ意欲を高める

単にレポートにまとめるのではなく、アプリを使って新聞記事を作るなど、アウトプット面で生徒に興味を持たせる仕掛けをしている。

苦労したこと

考え方自体が新しく、なかなか進まないが、教員も学びながらという姿勢でカリキュラムを作成させている。

高大連携・先取り履修の POINT

高大連携・大学教育の先取り履修においては、大学の教育についていけるように補助教材を用意するケースがあった。また、大学生や留学生との交流を学びに活かすケースもみられた。

POINT 1
大学側のメリットも意識して連携を行う

1 年生のゼミ形式の授業において高大連携を行っている。高校生たちが授業に入ることで大学生も刺激を受ける。大学は、積極的に参加する高校生に来てほしいと考えている。

POINT 2
大学の授業についていけるように補助教材を作成

大学の先取り履修について、大学生と同じように受講させた。1 年目は、良かったという感想よりも、どちらかというと難しいという生徒が多かった。そこで、2 年目は補助プリントを学校が用意して受講させた。大学からも「生徒の理解度は深まっている」と報告を受けている。

POINT 3
大学生や留学生との交流も行う

大学の教員と高校の教員・生徒が関わるだけでなく、大学生や大学院生、留学生などとも交流することで、高校生の視野を広げる機会としている。

海外研修・交流の POINT

① 海外研修・交流＜現地実施＞

海外研修・交流においては、多くの学校が授業などで事前学習や準備をし、生徒の態勢を整えてから現地での交流を行っていた。そのうえで、現地の方から指導やフィードバックを受けるケースもみられた。

POINT 1
授業での事前学習・準備

海外フィールドワークでのプレゼンテーション・ディスカッションが通用するように、英語科が指導している。また、毎週英語科でエッセイ添削をしており、英語で長い文章を書くことにも取り組んでいる。

事前学習として、海外研修旅行に関する学習や、英語でのディスカッションを中心に英語の力を付ける。現地では英語を使って喋らなければいけないため、研修前は不安を抱え「行きたくない」という生徒もいた。しかし、実際に行ってみると、結局英語で喋らなければならず、喋ってみるとなんとか通じたり、意思疎通ができたりする。自信を持って帰国し、最終的には楽しかったという感想が多い。その経験をして、さらに英語力を高めたいという意欲が出てくる生徒や、行ってみて良かったという生徒はかなり多い。

POINT 2
生徒へのフィードバック

海外研修は、現地でフィールドワークを行い、さらに探究を深めるという目的もあるが、もう一つの大きな目的がある。現地の高校と交流し、英語でプレゼンテーションし、そのフィードバックをもらうことである。そのフィールドワークで深めてきた内容を 2 月の校内の研究発表会で発表する。校内での最優秀賞・優秀賞も年度末に付けている。ルーブリックで評価し、それを生徒にフィードバックしている。

POINT 3
現地の生活の疑似体験

ホテルの滞在ではなく、現地の大学の寮に滞在させてもらっている。いろいろな国際学生が集まる寮での滞在を通して、そこで語学の習得というところもある。

② 海外研修・交流＜コロナ代替　オンライン交流＞

代替プログラムにおいては、オンラインであっても現地の状況を感じてもらうため、中継やインタビューなどで工夫する学校がみられた。また、生徒が主体的に ICT を活用していた。

POINT 1
多くの生徒が海外に興味を持つきっかけ作りとする

本来であれば 1 名の教員に対し 10 名の生徒を連れて海外（アジア）に行く予定であったが、コロナ禍ということもありオンラインの交流をおこなった。オンラインでは 1 名の教員に対し 40～50 名の生徒が海外（アジア）の市場や農園を見ることができ、非常に良かった部分である。匂いや空気まで感じるといった現地での経験は出来ないものの、多くの生徒が「次はあの国に行きたい」「あそこで何かやってみたい」という足掛かりにはなる。

POINT 2
オンラインを通じた現地の方へのインタビュー

オンライン海外研修では、オンラインでもできるだけ現地の状況を伝えられるよう、ライブ中継で繋いでいる。現地のスタッフが訪問先に行き、地域のお母さんにインタビューを実施した。

POINT 3
探究活動との連動性をもたせる

オンライン海外交流の際、WWL のテーマおよび探究課題のテーマに関する質問をいくつか事前に用意した。交流先にも答えを用意してもらい、意見交換をした。

生徒の希望ごとに、オンラインで工場見学をさせてもらっている。現地の工場の従業員にインタビューしたり、学校で取り組んでいる探究活動にかかわる質問をしたりしている。

POINT 4
ICT の活用機会とする

ICT 利活用については一気に進んだと感じている。生徒は自分で Zoom を立ち上げたり、別のアプリを使って発表したりと、主体的に ICT を適切に利活用している。

POINT 5
時差への対応の工夫

アメリカの生徒と、時差を超えて動画を共有して意見を出し合う企画があった。時差があるので、アメリカの生徒が動画を送ってきてもすぐに反応しなくても良く、一回それを見てどう答えるか考える時間がある。

③ 国内での海外交流

より多くの生徒が海外交流の体験をできるように、留学生等との交流機会を多く設ける学校もあった。大学への留学生との交流を積極的に行うケースもある。

POINT 1
留学生や外国籍教員との交流機会を増やす

2 年生の全てのクラスに留学生がいるようにしている。絶えず海外の生徒が学校内にいるようにして、海外に行かなくても同じような体験を日本でできる環境を整えるようにしている。

POINT 2
大学の留学生との交流機会を創出

大学に協力してもらい、留学生との課外プログラムを実施している。大学には、様々な国から留学生が来ているので、それぞれの国の社会問題について 15～20 分くらいのプレゼンをしてもらい、その内容について、高校生がどう考えたのかを英語で議論して発表する。

高校生国際会議の POINT

高校生国際会議の運営においては、会議のファシリテーターを生徒や卒業生に任せるケースも多かった。また、英語力に不安のある教員のために、全英語教員の授業を調整し、会議(紹介した事例は会議参加のための審査)に参加してもらう事例もあった。

POINT 1
ファシリテーション講座の実施

ディスカッションなどのファシリテーション役を高校生に担わせるにあたり、ファシリテーション講座を立ち上げた。文化的背景が異なる人たちとディスカッションする際に大事なのは、英語力以上に「どうすればディスカッションが深まっていくか」ということである。「気を付けなければならないことは何か」などのテーマを使い、ファシリテーションの練習に取り組んでいた。

POINT 2
卒業生の参加

ディスカッションのファシリテーターは、当校および県内連携校を卒業した大学生が担った。教員がファシリテートすると、特に日本の高校生は答えを待ってしまうところがある。生徒たちが自ら活発に意見交換をしてほしいと考え、ファシリテート能力があり英語が堪能な大学生 10 名に声を掛け、アシスタントとした。

POINT 3
英語でのプレゼンを審査出来る体制構築の工夫

国際会議の代表チームを決めるにあたり、英語教師全 9 名が授業を調整して、担当学年以外の発表・審査の場にも参加した。プレゼンテーションを英語教師が見て、英語科以外の教師も参加するセッション（質疑応答など）は、日本語で行った。それにより、英語科以外の教師も発表・審査出来る体制となった。

また、2 月になると 3 年生担当の教師は授業数的に余裕が出る。そのため、1 年間のまとめを英語で発表する機会を、その時期に合わせて設けている。

体制づくりの主な POINT

体制づくりの主な POINT について、「教員アンケート」から概観する。

課題や問題点

教員アンケートにて、WWL 事業の課題や問題点について聞いた。また、WWL 事業での役割(4 分類)別に比較を行った。

「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、運営担当・授業担当の教員の回答は 5 割前後であった。

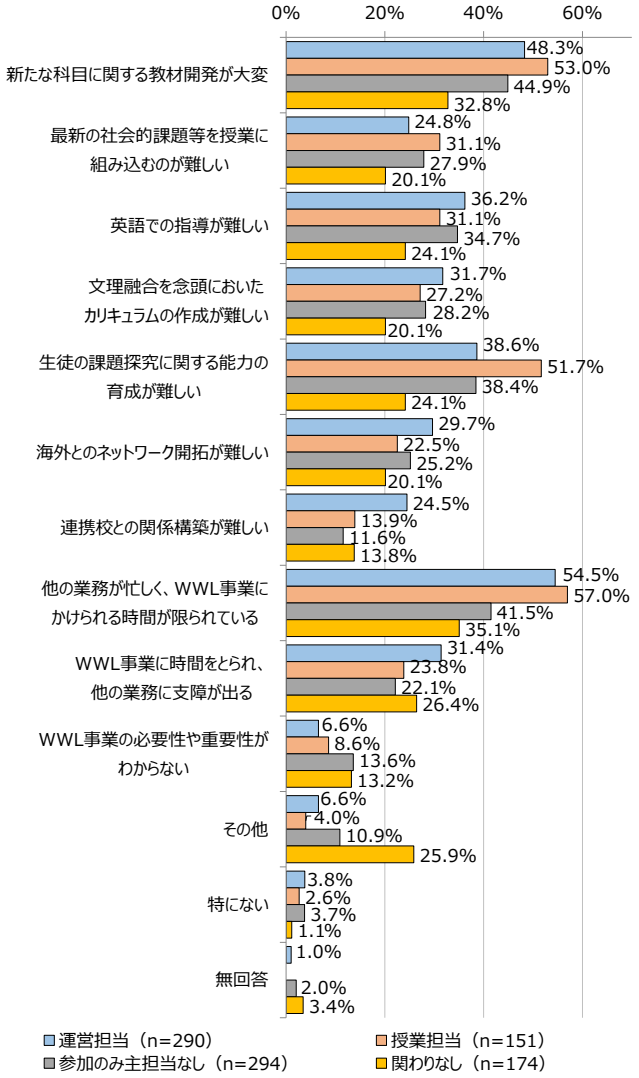


図　令和５年度　課題や問題点

自身への影響や変化

教員アンケートにて、WWL 事業による教員自身への影響や変化について、「あてはまる(あてはまる＋どちらかというとあてはまる)」と回答した割合をみた。

運営担当・授業担当の教員は、多くの項目で「あてはまる(あてはまる＋どちらかというとあてはまる)」と回答する割合が高かった。「学校外の国内組織等と連携・協働する力が向上した」等は、運営担当の教員があてはまる割合が高かった。

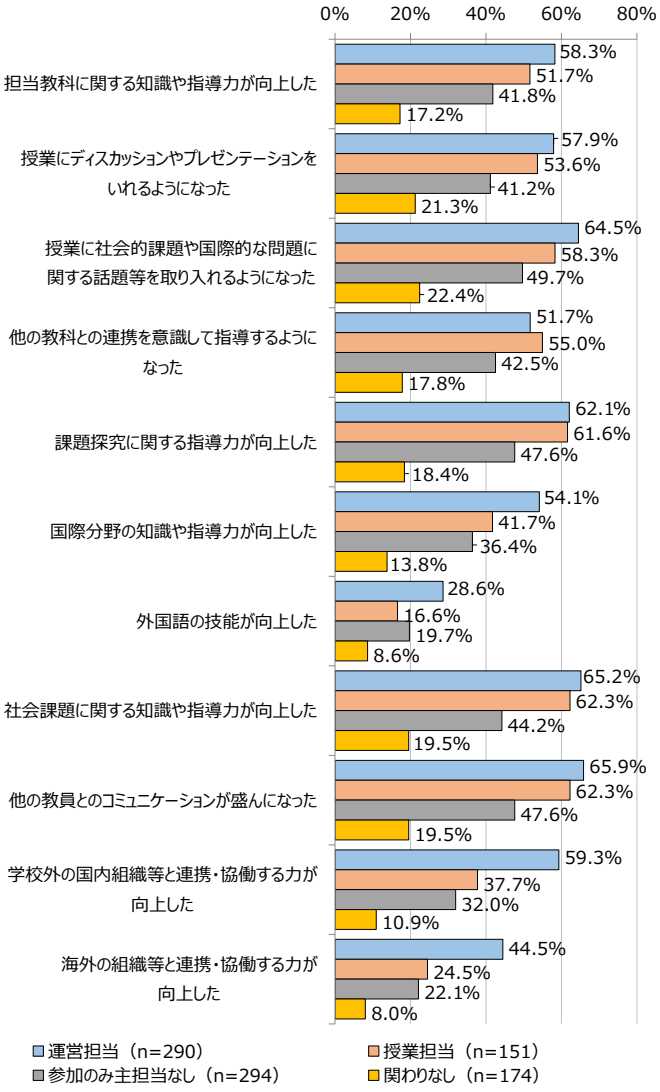


図　令和５年度　自身への影響や変化
(「あてはまる」＋「どちらかというとあてはまる」の割合)

以上の概観を踏まえて、次項から体制づくりの主な POINT を説明する。

① 学外連携

学外連携については、「互いにプラスとなる連携を意識する」ことが関係構築において重要なポイントとなる。また、連携をすることで負担が増え過ぎないように気を付ける必要がある。

POINT 1
互いにプラスとなる連携を意識する

ネットワークの構築について、長く維持し付き合っていく・深めていくにあたり、Win-Win の関係性を持つことが必要だと考えている。例えば、企業と提携した際、企業側のアンケートに生徒が答え、回答内容を利用して新しい開発に繋げるといったこともあった。また、今後自走していくことを視野に入れると、受益者負担的なものの必要性も考えている。各学校とは、「お互いどのような教育活動に取り組んでいるか」という点において交流することで、お互いにプラスになる部分が非常に大きい。最近の例では、オンラインを使って同時に授業を実施するという取組みを行っている。

シンガポールとの連携は、1 年目より 2 年目で深まってきた。日本の学生にアンケートを取ってほしいという依頼もあった。シンガポールの生徒の研究に当校のコメントが役に立つなど、向こうにとってもメリットがある。国際会議など意見交換がプラスになる。

苦労したこと

学校の開拓については苦労があった。時差、授業時間、冬休み期間のタイミングなど。興味を持ってくれる学校はあるが、一つの学校から、数人の希望者に来てもらうという形に留まっている。学校だけでなく、大学、企業に助けてもらいながら開拓していく必要がある。

POINT 2
連携による教員の負担軽減

海外大学への派遣の際に、「本校と一緒に行きましょう」と他の拠点校に声を掛けたり、教育プログラムを持っている企業や NPO と組むなど、負担の大きい海外フィールドワークなどを他と連携して進めることもある。学校単独でプログラムを作成していくことは教員の負担が大きくなるので、連携することで負担を減らしている。その他、新規に立ち上げることになったフィールドワークなどは、旅行会社のネットワークを活用して訪問先を開拓した。

POINT 3
管理機関や海外交流アドバイザーの活用

海外交流アドバイザーの雇用が大きい。オンラインになったことで選択肢が増えた。教員に求めることは難しいので、専門的な人材が必要だった。海外側のアレンジはほぼ海外交流アドバイザーが担った。教員だけでは出来なかったところである。

POINT 4
継続的なやりとり

海外校とは、すでにしっかり関係性ができている。関係性を保つうえで、年度始め、年度終了時のフィードバックを頻繁にし合うことは大事にしている。例えば韓国であれば、生徒が互いにメッセージを送り合ったりと、教員間のつながりだけでなく、生徒間のつながりも大切にして続けている。

POINT 5
人的ネットワークや様々な機会の活用

海外との連携において重要視している点は、様々な機会を見逃さないということである。中国との関連事業については、日中国交正常化 50 周年ということで、領事館でも日中間で活発に交流していこうという機運が高まっていた中、時期的にもとても良いということで始まった。ハワイとの交流については、現在ハワイ大学に本校の OB が勤めているので、そのつながりからハワイ大学付属高校とのつながりを開拓していった。最初は現地に行くための計画を立てていたが、コロナ禍で海外渡航が難しくなったためオンライン対話という形で始まった。

シンガポールの高校との交流は、元々シンガポールに修学旅行に行っていたこともあり、また、ネイティブ教員がシンガポール出身でその伝手があった。数年前から互いに往来していた学校があり、そこに直接声を掛けた。

苦労したこと

最初はネットワークをもっと広げる予定で色々構想はしていたが、それぞれの立場の方々とお話しする機会が限定的になってしまわざるを得ないという状況があり、中々難しかった。

現状の AL ネットワークの中でまずはしっかりと協力体制を築いていくことが大事であると考え、現存の連携校たちとまずはしっかりお話しし、その中で AL ネットワークの関係性を成熟させていった。ネットワークの連携校の間では、共通認識として、お互いの長所を共有し合うようなイメージを持ってもらうよう最初にお話しをしていて、それが浸透するのに約 1 年かかった。現在では、そういった意識がかなり強くなってきており、様々な学校を呼べるようなプログラムの案内が、他校からも徐々に出てきている。最初は、SGH※と何が違うか理解してもらうことが難しかった。今では相互に乗り入れ、相互に情報交換をしてともに高め合うという雰囲気ができ上がっているので、これも WWL 事業における大きな成果であると考えている。「AL ネットワークの学校は一つである」ということをよく言いながら、今では「皆でともに頑張りましょう」という雰囲気ができ上がってきている。

※
SGH(スーパーグローバルハイスクール)とは、文部科学省が国際的に活躍できる人材育成を重点的に行う高等学校を指定する制度です。

※より詳しい POINT などについては、文部科学省 HP「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業における EBPM に向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」ページ：
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1412770_00006.htm 「令和５年度調査研究報告書」 第７章 まとめ（P.163~） をご参照ください。

② 学内での WWL 実施体制作り・運営

WWL 事業について、学校内で定着を図るため、カリキュラム開発拠点校では、「WWL 事業を行う専門部署・委員会の設置」しているケースが多かった。また、「職員会議でのアナウンス」などにより、教員への普及を図っている。

また、他の教員が授業など行いやすいように、授業指導案や動画などを作成してノウハウを共有するケースもあった。

POINT 1

WWL 事業を行う専門部署・委員会の設置

毎月、校内で WWL 推進委員会を開催している。学校設定科目を担当している教員が全員参加し、課題研究を中心に情報共有している。その内容をさらに全教員に伝えており、全教員に協働の意識を持ってもらうよう取り組んでいる。

校内関係者による連絡協議会（推進委員会）を週 1 回行い、必要なことを確認し合っている。また、別の組織である校務主任会議（校務運営会議）でも情報共有し、あらゆる方法で全教職員が WWL に関わり、校内で連携している。

WWL を推進していった組織（推進室）は、他の分掌と同じように一つの分掌として位置づけた。WWL の講演は WWL 推進室がやる、というように学校行事の一つとして行った。担当者は、学校の方針を決める運営委員会にも参加し、職員会議に企画を提示し周知している。

苦労したこと

組織建てが肝である。WWL 推進の中心になるような部門を立ち上げること自体も難しいと思うが、推進部門がないと連携が取れない。高校の現場では学年単位で事業を回す部分があるが、WWL は 3 学年通しての設計が必要になる。その 3 年間を計画する組織が出来てないと本当に難しい。学年ごとで変わってしまったり、一つの学年で抱えてしまったりとなり兼ねない。大変だったが、何年かやっていく中で形は作れたという点では、WWL 推進室の組織力が大きかったと思う。探究の時間の授業を行う際、最初の立ち上げで委員会を作ることはある。しかし、他の分掌で部署を新しく作ることは本来とても大変なことであり、当校は職員が多いから出来ているところもある。

POINT 2

学年会議、職員会議でのアナウンス、話し合い

探究学習については、学年会の教員が中心となり計画を立て、様々な授業の内容・研修について話し合うこととなった。探究学習の内容・重要性・生徒の変容が、特定の担当者だけでなく、その学年に所属する他の教員にも見えることがメリットである。

出来るだけ情報を細かく伝えている。職員会議などで、事業計画などを周知している。WWL の担当組織が独りよがりにならないよう意識して、他の教職員と密に連絡をとるようにした。

POINT 4

授業指導案等の作成（探究型授業）

核になる先生が授業案を作り、他の教員たちはそれを参考に授業を実施している。また、「こんな声掛けをして、このタイミングでこういう生徒に発表させて、こんな感じで授業の流れを作ってはどうか」といったミニデモ動画を作って、他の教員に見せるといった取組みも行った。

POINT 3

関わる教員を増やすため、学際科目を利用

WWL 事業を行うにあたり、（SGH 指定校時代には関わっていなかった）普通科の教員をいかに巻き込んでいくかという考えから、学際的な科目を立ち上げて、関わっていく教員の数を増やした。

苦労したこと

生徒間にも教員間にも差異があって当然なので、建設的な対話をやめないことや、管理職ならびに管理機関の先生方との連携を密にとること等、全体で動いていくことが必要である。

担当者と学校としての枠組みとが同じ方向を向いていれば、全体で取り組もうという雰囲気になっていく。最初はなかなかわからなくても時間が経つと浸透するので、そこまで待つことが必要である。

③ 生徒のモチベーションアップ

カリキュラム開発拠点校では、生徒のモチベーションを上げるために「チラシや YouTube などのメディアの活用」や、「相談してアドバイスをもらう場を設ける」などの工夫をしていた。

POINT 1

メディアツールの活用

興味がある生徒/興味がない生徒はどうしてもいる。まずは興味のある生徒を引き付けていくよう走り出した。その中でも、メディア部隊（チラシ作成/YouTube 用動画作成チーム）がイベント参加者募集や終了後の報告動画をきっちり作ったことで、年々継承された部分があると思われる。FOCUS の HP も作成し、過去 3 年分の資料を全部載せており、参加する当校及び他校において過去の資料・プレゼン・参加者を見ることができ、良い流れになったかと思う。

POINT 2

相談できる場を設ける

生徒の意識をより積極的に探究活動へ向けるために、管理機関ではマイプロジェクト事務局と連携し、生徒に向けてアドバイスを送る機会を設けている。マイプロジェクトの全国大会が年に 1 回あり、最終的には県の代表者のみが出場する。代表選出に至るまでに、個人の進めている探究を報告しアドバイスを貰う機会を設けている。今年は生徒向けに「探究カフェ」として、気軽に自分の探究を相談できる場を設けた。

まとめ

◆ イノベーティブなグローバル人材を育成するカリキュラムを開発

✔ WWL コンソーシアム構築支援事業では、カリキュラム開発拠点校を中心に、イノベーティブなグローバル人材を育成するカリキュラム（探究型学習、外国語や文理等の融合科目、海外研修・交流、高大連携・先取り履修、高校生国際会議等）を開発。

✔ 「イノベーティブなグローバル人材」には、心構え・考え方・価値観等（グローバル・マインドセット）、資質・能力（グローバル・コンピテンシー）、探究スキルなどが求められる。これらの能力は、従来の学校教育の目指す学力とは異なっている。WWL 事業で開発したカリキュラム等は、これらの能力の育成に寄与することが確認された。

◆ 「取組への熱心さ（主体性）」と「コンピテンシー・スキル等」は、相互に影響を及ぼす

✔ WWL 事業を通じて、生徒には「社会的課題の知識獲得や関心の高まり」「国際的な知識獲得や海外への関心の高まり」「思考力・表現力・判断力の向上」「学びへの意欲の向上」「さまざまな視点の獲得」などの変化がみられた。

✔ グローバル・マインドセット/コンピテンシーや探究スキル等の能力の向上のためには、生徒が WWL 事業に主体的（熱心）に取り組むことが重要。熱心に取り組む生徒ほどスキルが高くなり、スキルが高い資質・能力生徒ほど熱心に取り組むという相互作用が確認された。

◆ 外国語リテラシーや探究スキルは着実に伸びる

✔ 初期段階で能力等の得点が低く、熱心ではない生徒の成長は見込めないのか。決してそのようなことはなく、外国語リテラシーや探究スキルについては、熱心度が低くても、ゆるやかではあるが 3 年間で上昇傾向がみられた。

✔ WWL 事業への熱心度が低くても、活動を続けることで「英語への苦手意識」は減少する。

◆ 苦手意識のある生徒には、国内フィールドワークや交流等でテーマに関心を持たせる

✔ 生徒の熱心度を高めるには、どうしたらいいか。熱心度の低い生徒は、「WWL 事業の課題が難しすぎる」「WWL 事業のテーマに関心がもてない」といった点が悩みとなっている。難易度設定も含め、生徒の関心が持てるテーマ設定・課題設定が重要。

✔ 「2 年生になって WWL 事業に熱心になった」生徒は、1年次と比べ「国内フィールドワーク」「他の日本の高校の生徒との交流」等に関心を持って活動を行っていた。まずは、国内で刺激を受け、関心度を高めることも有効。

◆ 教員個人の力で解決しようとせず、学内外の体制づくりが重要

✔ 教員は、「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」ことを課題・問題点と認識。そのため、カリキュラム開発・実行のためには、学校全体の体制づくりが重要となる。

✔ 学内の体制づくりのために「WWL 事業を行う専門部署・委員会の設置」や「職員会議でのアナウンス」などにより、教員への普及を図ることが有効。また、他の教員が授業など行いやすいように、授業指導案や動画などを作成してノウハウを共有することも有効。

✔ AL ネットワークにより、管理機関や外部組織のリソースも活用することも、WWL 事業の推進には有効。ただし、連携をすることで負担が増え過ぎないように気を付ける必要がある。「互いにプラスとなる連携を意識する」ことが関係構築において重要なポイント。

令和5年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業における EBPMに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究

運営指導委員会　委員名簿

木村　昌臣	芝浦工業大学　工学部　情報工学科　教授 国際交流センター　センター長
佐藤　真久	東京都市大学　環境学部　教授
須藤　康介	明星大学　教育学部　准教授
椿　広計	情報・システム研究機構　統計数理研究所　所長
濱中　淳子	早稲田大学　教育・総合科学学術院　教授
松本　茂	東京国際大学　言語コミュニケーション学部　教授 国際コニュニケーション教育研究所　所長
矢野　眞和	東京工業大学　名誉教授

（敬称略、五十音順）

令和５年度　文部科学省委託調査
WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に
おけるＥＢＰＭに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究
令和６年３月発行
関連リンク：「令和５年度調査研究報告書」ページ
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1412770_00006.htm
（委託先：株式会社リベルタス・コンサルティング）
・・・
文部科学省　初等中等教育局　参事官（高等学校担当）付
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
電話　（03）5253-4111（代表）

文部科学省